愛知教育大学研究報告，50（人文・社会科学編），pp. 113～121, March, 2001

ヨハン・ホイジンガ研究の動向（2）

杉浦　恭
Takashi SUGIURA
保健体育講座

はじめに

本稿は研究報告第49輯に記した「ヨハン・ホイジンガ研究の動向（1）」の続編である。前編では，歴史家としてのホイジンガに関する研究，遊びの研究家としてのホイジンガに関する研究について報告した。本稿は，近代文明批評家としてのホイジンガに関する研究動向を報告することを目的としている。これは，近年，オランダの歴史学界で起きているホイジンガの再評価論，つまりホイジンガを近代文明批評家として捉えようとする動きを受けてのことである。

ホイジンガの記した文献を年代順にあたってみると，近代文明批評に関する内容は，1918年に出版された『アメリカの人間と大衆』を始めとして，その後，数多く現れてくる。そして，1930年ごろから，ホイジンガが死去した1945年にかけては，その口調が一層厳しくなっている。率直に近代文明批評を展開したものについてはそのまま理解するとして，それ以外の文献のなかにもそれを近代文明批評の一端として読めるものがあるという思いが筆者にはある。これについても本文で若干触れるが，ここではホイジンガの近代文明批評について行われた研究を中心に報告することにする。

ホイジンガの近代文明批評については，これまで体系的に捉えて分類した研究はないので，筆者が4つの柱立てをして整理することにした。

1．ファシズム批判と近代文明批評

1930年代の前半，ホイジンガはナチズムに照準を合わせながらもファシズム全般に対して批判的態度を現し始める。その代表的著作が1935年に出版された『明日の影のなかに』である。これはオランダ国内はもとよりヨーロッパ全土で反響を呼んだ作品である。1939年までに，ドイツ，イギリス，イタリア，スペイン，フランス，北欧，東欧等，各国に翻訳出版された。

Pellecom (1936) は，知識人をはじめ，広く支持されているオランダの総合文化雑誌『De Nieuwe Gids』のなかで，いち早くこれを取り上げコメントしている。彼によれば，『明日の影のなかに』は，この時代の人々が，何となく心に感じていながらも言葉で表現しにくかったことをうまく言い当てた作品であるという。時代がこの状況や社会をつくってしまったとホイジンガが言ったために，読者は第三者的な立場から距離をおいてこの作品を読むことができ，読者自身が責められているような気持ちにはならない。そして，内容が広く人々の日常生活全般を扱っていることで，日頃，物事を深く考えない人々が，考えるきっかけをもつようになった。このことが人気を得た理由であるという。だが，『明日の影のなかに』は科学的根拠が十分でなく，芸術の分野に関する記述はオリジナリティーに欠けるともいっている。そして，文明と道徳の崩壊を述べながらも，その処方箋についてはなんら提案がないことをして，ホイジンガは必ずしもオプチミストではないと Pellecom は評価した。

確かに Pellecom のいっていることにも一理あり，『明日の影のなかに』は研究書ではない。だが，ファシズムが横行する時代に，このような鋭い指摘ができたのもホイジンガならではである。

ホイジンガと研究交流のあったスイスの歴史家 Kaegi は，歴史学者としてのホイジンガがヨーロッパの政治に向かって声をかけたのが『明日の影のなかに』であるという。ホイジンガが取り上げた内容のなかで最も危機感をもって訴えたのは政治と科学の結合である。同じような視点で警鐘を鳴らしたものはこの時代に幾つか見られるが，問題の原因の本質を突いているのはホイジンガであるという。そして，人々の批判能力と判断力の衰退は，科学の著しい進歩よりも，自ら考えようとする努力をしない怠惰な態度をもった人間の結果であり，教育にも責任があるという。知の危機が道徳の危機へと悪転するのは，科学の乱用だけでなく，知的機能の純粋さの否定にもある。それが顕著に現れるのが政治における悪用であるとしている。また，知は生活に役立たせなければならないという考えに支配されがちであるからでもある。『明日の影のなかに』はホイジンガが人間性の再統合と人間のあるべき姿を記したものであると締めくくっている。(Kaegi 1947, pp. 26-31)

確かに『明日の影のなかに』は内容からしてファシズム批判の書である。しかしこの作品に関するコメントをあたってみると，意外なことにファシズム批判として読み込み，論じている文献の少ないことに気づく。ファシズムを視野に入れながら大衆社会論，そしてさ

らに広い枠組みで読み込もうとしているものが多いのである。わが国の文献をあたってみると，『明日の影のなかに』を初めて邦訳した藤縄は，解説のなかで，「この書は『中世の秋』のような歴史家ホイジンガの研究を結晶した力作ではない。むしろ文明批評，時代批評に属するものといってよい。しかしやはりそこには『中世の秋』にみられるような優れた歴史家としての眼があり態度がある。それは，ある時点の文化の一つ一つを公平に，たいせつに叙述し，それを深く愛し楽しむ態度と言ってよかろう。(藤縄訳書1971，378頁)」と述べている。

また，小松原は，すでに1954年に発表した「文化史家ヨハン・ホュイジンガの生涯と思想」のなかで，ホイジンガを，反ナチスの英雄的なレジスタンスとともに，文化史家から文明批評家へとして紹介している。

「『Julien Benda にあてた手紙』(1933)『朝の影の中に』(1935)に於て歴史家には無縁であった無数の言葉が吐露されたことは，一般に Huizinga の歴史に対する断念と解されている。彼は人並以上に現代の汚された精神文化とその道義的性格を深く観察した。(小松原　1954)」

ホイジンガの歴史に対する断念という記述については疑問が残るが，小松原のいうように，ホイジンガの記述には明らかにそれまでとは違った口調がみられる。さらに小松原（1954）は，アメリカの生活様式と精神形式の底に流れるメカニズムの非人格化を，ホイジンガは『明日の影のなかに』を執筆する以前に感じていたことに触れ，現代の精神文化に関して，ホイジンガが文明批評家としての視点から批判的に述べるようになったといっている。

栗原（1972，6，20頁）も，『明日の影のなかに』を一方ではファシズムに対する痛烈な批判書として読み，ファシズムを生んだ現代文化の危機的状況を警告し，現代文化における大衆社会的現象を指摘した作品であるといっている。しかし他方では，現代文化の病患を指摘し告発する警世家として，また，現代文化の進む方向に大衆社会的状況の支配を予見する文明批評家として，ホイジンガが時代と社会を記したという見方をしている。

とすれば『明日の影のなかに』は二つの視点で読むことができよう。ひとつはナチスに照準を当てながらファシズム全般に対する批判という読みである。もうひとつは近代文明または現代文化に対する批判という読みである。『明日の影のなかに』については，再度，近代文明批評という視点での読み込みが必要である。

2．歴史家から近代文明批評家へ

ホイジンガにはそれまでの歴史家としての顔に加えて，さらに近代文明批評家としての人物像が浮かび上がってきた。これに関して，近年出版された研究書に次のような言及がある。

ホイジンガは，当時，オランダの誇る偉人としてまつりあげられようとしていた。業績をみても確かにそれ相応であり，今でもホイジンガに関する多くの論文が出ている。オランダの生んだ偉人の中でみれば，ホイジンガより有名なのは，エラスムス，グロチウス，スピノザ，ホイヘンスだけである。ホイジンガに関する研究は，今日でもやはり『中世の秋』を対象としているものが多い。しかし，1930年代には『明日の影のなかに』がそれまでのホイジンガのイメージを一新した。歴史家から文明批評家として世に認識されるようになったのである。『中世の秋』のようなロングセラーにはならなかったものの，『明日の影のなかに』はこの時代のベストセラーであった。(Wesseling 1996, p. 10)

1930年代になってホイジンガは近代文明批評家として認識されだしたのである。では，当時の研究者はどう見ていたのだろうか。

ホイジンガと同じ時代に生きたオランダの歴史学者で王立科学アカデミーの一員である Vollgraff 教授は，ホイジンガの死去した1945年に，ホイジンガの人生と業績を振り返る趣旨の講演を行い，次のように述べた。

「ホイジンガは『中世の秋』と『エラスムス』を著して世界的名声を得た。誰もがホイジンガはその後も文化史家として生きてゆくだろうと考えていた。しかし，ホイジンガは自らの生き方を近代文明批評家に転向した。過去の時代にあこがれ，文化史の研究を継続したかったホイジンガに，現在の状況がどうしてもそれを続けさせないほどの問題を提示したからである。率直に言ってしまえば，ホイジンガは仕方なく近代文明批評を行うようになったのである。現代の病に対する警告を，歴史家の眼からみた道徳的義務意識のうちに発せざるを得なかったのである。

ホイジンガはやがて近代文明のもつ様々な危険性がなくなるだろうと楽観的に考えていた。それは一時的な熱病のようなものであると思っていたようである。しかし，1933年以降その様な楽観的な認識はホイジンガから消え去った。

この時代にあって，ホイジンガは良心の声に従うという，ある意味では苦悩を強いられる状況のなかでも，それを勇気をもって受け入れ，現代の様々な問題に対して，最後まで正義感をもって訴え続けたのである。尊敬に値する第一の人物といえる。(Vollgraff 1945, p. 30, 36)」

つまり，当時の歴史学者が見ても，ホイジンガは歴史家から文明批評家へと転向したように見えたのである。事実，ホイジンガの業績をみても，1920年頃からそれまで行ってきた文化について記述的に取り組む研究に加えて，文化に対する規範的な研究姿勢が目につくようになる。新たにホイジンガには，近代文明批評

家としての評価が加えられることになったのである。

ただ，ホイジンガが近代文明批評家となった経緯やきっかけ，あるいは動機については見解が分かれている。Vollgraff が言ったように，時代・社会背景がホイジンガをそうさせたという見方がある一方で，Wesseling（1996, pp. 12-16）は，その様な見解，特に1930年代のオランダの政治的・経済的状況がホイジンガを近代文明批評家へと転向させたという見方は言い過ぎであるという。というのは，既に1920年代からホイジンガは全ての科学的な手法に疑問を抱いていたし，ホイジンガ自身，1930年代になると創造的思考性を減退していたと Wesseling はいう。むしろホイジンガに対して，当時の社会が近代を批評する役割を期待していたことが大きな要因ではないかとみている。

また，『明日の影のなかに』の中心テーマである文化の衰退は，それ以前の著書である『中世の秋』や博士論文にもみることができるという。つまり，ホイジンガの近代文明批評の発想は1930年代に突如として現れたものではない。例えば，『明日の影のなかに』に書かれている近代文明批評の内容は，1934年に書いた国際連盟知的協働国際機関編集の文集への寄稿「ジュリアン・バンダへの手紙」にも確認できる。ホイジンガの近代文明批評は，長年温め続けていた事柄が，1930年代に現れたまでのことであるという。1934年から1935年にかけて，ホイジンガが幾度となく近代文明批評の観点から文化の危機を講演したため，この時期に文明批評家として有名になったのだと Wesseling はいう[1]。

近代文明批評家としてのホイジンガを見ようとするならば，1930年以前にその言動が見て取れるし，文筆活動も行っていた。ただ，1930年代になって，時代・社会背景がホイジンガを一層近代文明批評に駆り立てたことは確かである。正面立った批評を研究・教育活動のなかで展開し，内外に訴えたのがこの時期であった。それゆえ一般に，ホイジンガは1930年代に近代文明批評家として認識されるようになったといえよう。

3．近代文明批評の内容と分析について

では，ホイジンガの近代文明批評の内容について，具体的にどのように捉えられていたのだろうか。これについて，数人の分析と考察をみてみることにしよう。

ホイジンガの近代文明批評については半世紀前からコメントこそされてきたが，これを体系的に捉えようとしたものはなかった。やはりホイジンガを体系的に見ようとする研究家は，歴史家としてのホイジンガに関心があったのである。この点で，ホイジンガを近代文明批評家として捉え，その主張と全体像をある程度明確にしようとする試みは意味をもつことになる。

1996年，ホイジンガの死後半世紀を経て，二人の研究家が，ホイジンガの近代文明批評について，その全体像をまとめようとした。偶然にも二人は同じ年に発表している。死後半世紀という区切りの時期，世紀末に寄せる思い，今日世界が直面している様々な問題への関心，ホイジンガの近代文明批評は，二人の研究家によって再び歴史学の表舞台に現れたのである。

その一人が，前にもあげた H. L. Wesseling である。おそらく現時点でホイジンガの近代文明批評を最もよく捉えた人物であろうと思われる。

Wesseling は，ホイジンガの近代文明批評を三つの観点から捉えられるという。第一に，ホイジンガの個人的主観性から見た捉え方であり，ホイジンガの人生と性格・人格から分析している。第二に，集団的主観性から見た捉え方であり，オランダ人としての国民性から分析している。第三に，時代の主観性から見た捉え方であり，この時代の精神から分析している。(1996, p. 27)

まず第一の観点からみれば，近代文明に対するホイジンガの見方は悲観的である。Wesseling は，ホイジンガの息子 Jacob Huizinga が，1936年８月，父に宛てた手紙の中で，『明日の影のなかに』において，父ホイジンガは自らをオプチミストと言っているがそうとは思えない，現世は意味のないもので神にまかせようとする父の態度はオプチミスティックではないと綴っていることを指して，悲観的と考えている。ホイジンガの最も身近な身内の発言を尊重しての記述であろうが，息子とてホイジンガの真意を理解していたかどうかは定かでない。ただ，この著書を読んだ多くの人が，ホイジンガをペシミストとして評価していたことは事実である。

さらに Wesseling は，近代文明批評の展開について，ホイジンガの身辺に起きた出来事との関連性を見逃してはならないという。近代文明批評に関する作品の多くは，ホイジンガの周りで起きた何らかの変化と時期が一致しているというのである。例えば，ホイジンガ自身，文明の危機と不安は，親友である Cornelis van Vollenhoven の死（1933年）から始まったと言っている（Huizinga 1945a）ことを指摘する。また，子どものころからの友人である Andre Jolles がナチズムに同調したこと，これも1933年に起きている。そしてヒトラーが政権を握ったのもこの時期である。ちょうどこの時期に，ホイジンガの子どもたちは自立して家を離れ，ホイジンガは孤独感に苛まれていたとみる。ホイジンガを取りまくこれらの個人的要因が，近代文明批評のなかで厳しくも寂しいタッチで表れることになったと Wesseling はいう[2]。

ところが1938年に出版された『ホモ・ルーデンス』は，それまでの近代文明批評とは違うタッチで書かれている。遊びと文化を記述するにも，何か明るい積極的なムードが感じられる。興味深いことに，その前年の５月１日，ホイジンガの家に家政婦として Auguste

Scholvinck が来ている。その2週間後にホイジンガがプロポーズ，二ヶ月後には結婚，以来，ホイジンガの生活に明るさと活気が戻ってきたと Wesseling はいう[3]。

同じように近代文明批評を扱った『汚された世界』は,『明日の影のなかに』と比べると,やや希望的なタッチで書かれている。これは「妻，アウグストに奉ぐ」と書いてから本文を書き始めているように，この時期のホイジンガには若干希望が見られるというのである。

このように，ホイジンガの近代文明批評は，ホイジンガの人生のなかで起きた出来事と何らかの関連をもってみることができると Wesseling は考える。

第二に，集団的主観性から見たホイジンガの近代文明批評についてであるが，Wesseling は，これをホイジンガのオランダ人としての国民性から捉えている。

ホイジンガは，当時，国際的な知識人の間で典型的なオランダ人と見られていた。ヨーロッパ内における多言語性の意義,小国の存在意義について主張し,ヨーロッパの文化的多様性の保持と存続について説いた。その上で時代の病と見られる超国家主義を幼稚性の現れ，今世紀の呪いとしてみていたという。

そして，ホイジンガの作品に見られる近代文明批評と道徳観は，オランダの精神と規範に則ったものであるという。『明日の影のなかに』で記された倫理･道徳の多くは，オランダにおいて，伝統的に高く評価されてきたものであり，それは，中庸，質素，寛容，真面目さ，国際協調といった典型的なオランダの精神に基づくものであるとしている。

つまり，Wesseling は，ホイジンガの近代文明批評が，オランダの伝統的国民性から展開されていると分析しているのである。なかでも道徳観の欠如と超国家主義に対しては，これまでオランダが普遍的な善として守り続けてきたことからの批判であると見ている。

第三に，時代の主観性から見たホイジンガの近代文明批評について，Wesseling は，ホイジンガの生きた時代の精神との対照で捉えようとしている。この第三の着眼点が，ホイジンガにとって近代文明批評を展開する最も大きな要因であったという。

ホイジンガは現代という時代そのものが病に侵されていると感じていた。長い間，戦争はある面でオプチミスティックにみることができたのに，第一次世界大戦に至ってそれも終わった。また，様々な形で近代的な独裁制が現れた。このような時代背景からホイジンガは近代文明批評を展開したというのである。

その結果，Wesseling は，時代の精神を，政治体制と，それに影響を受け左右される文化と文明という観点で捉えている。そして，現代の精神を過去と比較するならば，ホイジンガは現代に対してネガティブな評価を下さざるを得なかったというのである。

しかし，Wesseling は，時代の精神を近代文明一般との関係で見ることなく，前述したように，戦争や政治体制との関係のみで語っている[4]。それも何が何に対してネガティブに作用していたかについては具体的に記していない。また，病に侵されている時代の精神についてもホイジンガの近代文明批評との関連を明確にしていない。時代の精神，この場合はホイジンガの生きた時代の精神を，ホイジンガの近代文明批評との関連で捉えることは確かに重要な視点であり，整理する上では一つの柱となろうが，Wesseling の場合，立証性という点では弱い。課題として残るのは，時代の精神を具体的に挙げることと，それがホイジンガの近代文明批評にどのような形で現れ，展開されているのかについての考察である。

ホイジンガの近代文明批評の内容について分析と考察を試みたもう一人の研究者が Léon Hanssen である。

Hanssen は著書（1996）のなかで，ホイジンガの近代文明批評について叙述的に記している。体系的には書かれていないものの，幾つかの点で鋭い指摘と興味深い分析・考察をしている。その主な内容について，記述することにしよう。

まず Hanssen は，文明批評について，それを述べる人間の基準や立場について言及する。いつの時代にも文明を批判する者はいるが，何を基準にその様な人たちは批判しているのか。文化や文明が病んでいたとしても，彼らは自分だけは病んでいないという確信からその様な言動を取っているではないか。あるいは現実を受け入れられない人が文明批評を展開しがちなのではないか。文明批評家はどのように自分の主張を正当化するのか。根拠はあるのか。このような疑問が起きる。

これについて多くの文明批評家達は，個人，国民，そして歴史的なアイデンティティーから文明批評を行っているという[5]。基本的にホイジンガもこの範疇に入ると Hanssen は考えている。

個人という視点からホイジンガの文明批評を見れば，ホイジンガは自分の精神的基礎と拠り所をかなり客観的に認識していた。これについては納得したとしても，ホイジンガが自分の人格を単純でなんら問題がないと考えていた点はどうか。そのうえで，全ての文明は自分と同じように，単純，明解，純粋であればよいと考えていたことに問題はないのか。Hanssen は，これをホイジンガの自己イメージに過ぎないという。ホイジンガの精神はそれほど単純明解ではなく，かなり不安定な要素もあったと見ている。

次に,国民,つまりオランダ人としてのアイデンティティーから見たホイジンガの文明批評には，オランダの地理的・政治的位置や役割が強く作用しているという。そしてホイジンガの抱いているオランダの概念は,

国民と国家という二つの要素から成り立ち，それを基に文明批評を展開し，自らの主張に正当性をもたせようとしていると指摘する。

Hanssenによれば，ホイジンガは20世紀に入ると繰り返しオランダの精神の特徴について記そうとしてきた。東西文化の架け橋となるオランダのイメージを持ち続けてきたのに，1930年代に入るとそれも空しさに変わってしまった。そのため過去のオランダ，例えば，17世紀のオランダに理想を求め出した。歴史的なアイデンティティーから文明批評を行うようになった所以がここにあるという。ヨーロッパ内におけるオランダの位置と役割が小さくなったという評価に対して，ホイジンガは歴史的なアイデンティティーに文明批評のベースを移したというのである。

ところでホイジンガが自分の生きている時代を最も鮮明に知覚したのは，第一次世界大戦直後から1920年代であった。この時代をホイジンガは黒いベールに覆われた暗い時代と考えた。現代の汚された世界をより明確にするには，それ以前の歴史が大いに対比されてしかるべきだと考えたのである。Hanssenは，ホイジンガが過去の全ての文化を現実からの逃避に使っているかのように思えるという。しかしそれはホイジンガを満足させることにはならず，一時的な安堵感を得ることでしかなかった。最終的に近代文明から逃れられないことを知ったホイジンガは，近代文明がさほど重要なものではないという消極的な評価を下さずにはいられなかったという。また，若いときから形而上的な事柄に対する思い入れが強かったことも，近代文明を受け入れ難かった要因であると見ている。

ホイジンガにとって，『ホモ・ルーデンス』は，理想と理論がうまくかみ合った作品である。しかしこれも内容のほとんどが，過去の歴史にその根拠を求めている。『ホモ・ルーデンス』でいう「遊びと文化」の視点で近代文明を見れば，空しさと悲しみが残ることにホイジンガは気づいたはずだという。

さて，歴史的なアイデンティティーからホイジンガが文明批評を展開したことについて，Hanssenは，17世紀のオランダに対照させてホイジンガが現代を批評したと述べているが，これについてはLem（1997）も同じコメントしている。

Lemは，オランダの黄金時代（17世紀）に関するホイジンガの興味を分析した。これは，Wesseling とHanssen が前述の研究書を発表した翌年のことである。両者の研究を踏まえての分析であろうが，ここにきて再びホイジンガ研究家によって近代文明批評家としてのホイジンガが研究対象として注目されていることが分かる。

Lemは，ホイジンガが若いころから17世紀のオランダに興味をもっていたとみている。17世紀という時代を記すことが，オランダ人の気質や民族性の理解を助けると同時に，オランダの特質性の源泉を明らかにすることにもつながるとホイジンガが考えていたからである。しかしLemは，ホイジンガが17世紀のオランダを，自分の生きた時代と対照させて記述したと考えている[6]。これは，これまで近代文明批評あるいは現代社会批判との関連で捉えられることのなかった新たな解釈である。

とはいうもののホイジンガは，オランダ史への純粋な興味から17世紀のオランダ文化を著したと思われる。それは，オランダの最も輝かしい時代を，世界に向けて紹介しようとする試みからである。

17世紀のオランダ文化は三つの理想的な理念をもっていた。一つはオランダ社会の市民的性格が，当時のヨーロッパ社会と違い，平等の理想をもっていたことである。これは倫理的理想の理念である。二つめは，レンブラントに代表されるような，現実世界をありのままに美しく描写することである。これは美的理想の理念である。三つめは，エラスムスとグロチウスの理想を学び深化させようとする態度で，これは知的理想の理念といえる。これらをもとにホイジンガが17世紀のオランダ文化を著したとLemは考えている。

確かにホイジンガの興味は第一に17世紀のオランダ文化にあったと思われる。では何を根拠にLemはこれを，現代への批判あるいは対比として読むのだろうか。残念ながらそこまで詳しく述べていない。Lemいわく，ホイジンガは17世紀のオランダ文化を理想化して描いたが，それは純粋さに対する過去への憧れよりも，結局は正義と自由にもとづいた世界への希望を表現したかったのであり，それをオランダ史の中に探そうとしていたのである（Lem 1997, p. 324）。Lemは，それ以上，詳細・明確に言及していないが，文脈から読みとれるのは，ホイジンガが現代に欠けている正義と自由にもとずいた世界の実現をいわんがために，17世紀のオランダ社会を理想化して描いたということである。

ここで今一度，視点を近代文明批評と『ホモ・ルーデンス』に移してみたい。Tollebeekは，『ホモ・ルーデンス』が過去の文化と対比させて，現代の文化衰退を訴える意図をもって書かれたと考える。また，文明が健康な状態であり続けたいのならば，どのような条件を満たさなければならないかを示唆したのが『ホモ・ルーデンス』であるという。とすればこの作品は，当然，近代文明批評として読めるというのである。現代は絶対的な規範や規則がなくなっている。これは『ホモ・ルーデンス』でいう規則がなくなることであり，遊びが遊びでいられなくなる状態を意味する。これこそが文化を腐敗させることになるのであり，現代文化の行き着く先であるという。（Tollebeek 1996, p. 240）

ここまでホイジンガの近代文明批評の内容とその分析についての先行研究を概観してきた。特に体系的に

捉えられているといえるものはなかったが，それでもWesseling や Hanssen の捉えた三つの視点はホイジンガ研究の大きな進歩であろう。また，17世紀のオランダ文化の記述を近代文明批評との対比で読み込もうとする新たな取り組みも十分検討に値する。

4．ホイジンガの近代文明批評に関する批判的見解

ホイジンガの近代文明批評について，これを批判的な観点から記した文献もある。それらのほとんどは，主として『明日の影のなかに』で述べられている内容に対する批判である。やはりこの作品がファシズム批判と同時に近代文明批評として読まれていたのである。むろん近代文明批評に関するホイジンガの業績はこれに限らず幾つか見られるが，それらに対する批評はことのほか少ない。『明日の影のなかに』がホイジンガを近代文明批評家として世に知らしめた代表作なのであろう。ここでは近代文明批評のなかでも『明日の影のなかに』中心として，それを批判的に分析・考察した文献を取り上げ，その内容をみることにする。

『明日の影のなかに』は1935年3月8日にホイジンガがブリュッセルで行った講演をもとに，同年7月にTjeenk Willink 社から出版された。翌年には早くもこれを批判する二つの論文が出た。その後，『明日の影のなかに』を題材に，幾つかホイジンガの近代文明批評を批判する趣旨の記事が書かれたが，ほとんどは二つの論文で書かれた内容に近いので，ここでは二人の主張に絞ってみることにする。

はじめに Blok の主張を見てみよう。彼は『明日の影のなかに』を皮肉って，『明日の影のなかにではない，来る日の光のなかで』(1936) という題目で発表した。題目を見れば分かるように，ホイジンガの『明日の影のなかに』を評する文献である。

「自分はホイジンガとは違ってオプチミストであるゆえ筆を執った。ホイジンガは自らをオプチミストと言うが，彼はペシミストである。なぜならばホイジンガは明日の光を信じていない。希望しているだけである。ホイジンガは現代をカオスと見ているが，私は将来に対する光を信じている。我々は，今，すでに来たるべき光のなかにいることを，ホイジンガはわかっていない。(p. 3)」

このような序文で始まり，ホイジンガをペシミストとしながら，自分はすでに来たるべき明るい未来を予感しているオプチミストであるといっている。

まず，現在という時代の認識について，ホイジンガは今を不安定な時代と言うが，中世を考えれば決して今だけが悪い時代というわけではない。80年戦争，ナポレオンの侵略と比較してもそうである。この点で『明日の影のなかに』は今をペシミスティックに記しているが，これは時代の雰囲気をただ暗くするだけである。(p. 4)

次に，進化という点について，これを理解している者は絶えず前へ進むしかないことを知っている。昨日良かったことはあくまでも昨日の時点で支持されたことであり，今日，新たに進んだことが現れれば，今日のそれが支持されるのである。後戻りはできない。これは新しいものが古いものを否定するということではない。新しいものは古いものを踏まえた上で発展したものであるからである。(p. 6)

文化についても同じようなことが言える。新しい文化を創造するための努力を全て悪いものと過小評価する必要はない。その様な人間は，現実を理解していないし，むしろ拒否しているだけである。常に過去を回顧回想している人は，精神が昔の時代に留まっているのである。(p. 6)

かといって，全て古いものを捨て去れというのではない。良いものは残し，時代遅れのものは新しいものに代えればよいのである。(p. 7)

Blok は，ホイジンガが一律に現代だけを不安定な暗い時代と診断し，新しいものを批判していると考えている。現代という時代を拒否して，過去の良かった部分ばかりを見ているというのである。ホイジンガのそういった態度は今の状況をいたずらに暗くするだけであり，ホイジンガ自身にも進歩が見られないと評価している。

また，「行為」について，ホイジンガは「行為」の重視が暴力を招きやすいと考えているが，これは誤りである。暴力につながらない「行為」の方が多いのである。「行為」を軽んじれば，それは他人に利用されやすくなるだけで，国際的な見地から見れば放任主義へとつながる。(p. 11)

ところでホイジンガはナショナリズムについてはコメントしていない。これは不思議なことである。ナショナリズムは悪く展開する場合もあるが，そうでないこともある。愛国主義に基づいた意味でのナショナリズムは悪くない。全面的にナショナリズムを否定しようとするのは間違いである。(p. 12)

Blok は「行為」の重視を積極的に評価することを主張している。そして，おそらく Blok は，ホイジンガがナショナリズムを全面的に悪いものと考えていたと思われる[7]。

当時，ホイジンガの近代文明批評を批判的に評したもう一人の人物が Genechten である。彼はオランダの国家社会主義運動に所属・参加しており，その運動組織の機関誌『新しいオランダ』において，1936年1月，「ホイジンガに反対して　―昨日の霧から出て―」という論文を発表した。これも Blok と同じように『明日の影のなかに』を皮肉ったタイトルを付けている[8]。

この論文は，主に，資本主義の終焉と国家社会主義の時代の到来という視点でホイジンガを批判している

が，全体を通してその主張を見てみよう。

まずGenechtenは，序文で次のような内容を書いている。

ホイジンガは『中世の秋』において，中世からルネサンスへ移る過渡期を実によく捉えて分析したのに，今は『明日の影のなかに』を読んでわかるように，古い時代から新しい時代，新しい社会への変動を捉えられないでいる。ホイジンガはどうしても悲観的にしか時代を語れない。今や資本主義と近代科学は絶対的な動きであるのに，どうしてそれを歴史家として客観的に捉えられないのか。国家社会主義も時代や社会が要請する変化と考えることができるであろうに。

このように書いて，ホイジンガを新しい時代を捉えられない歴史家と見ている。そして，国家社会主義も現代という時代が要請するイズムと考えている。

Genechtenは，本文でさらに続ける。

ホイジンガは，開花する資本主義の精神生活を実によく描いた。それと同じようなレベルで今の時代，すなわち，「資本主義の秋」の精神生活を描ける者はいないだろう。だがホイジンガは自分の時代となると，理解していなかった。ホイジンガは19世紀を支配した感情から離れることができなかったのである。中世という時代の崩壊について，当時多くの騎士達が不満を訴えたのと同じように，ホイジンガはヒューマニストの立場から資本主義の崩壊について不満をもっている。(p. 10)

このようにGenechtenは述べ，資本主義の世界が今まさに終焉を迎えようとしており，次に来るのは国家社会主義を中心とした時代であると考えている。時代は国家社会主義に移ろうとしているのであり，それを批判するような『明日の影のなかに』は，安っぽい人生哲学を説く本であるとしている。明らかにGenechtenは，国家社会主義に同調し，その主義主張が時代にあった正しいものと考えている。

さらにGenechtenは，ホイジンガに対する批判を続ける。

ホイジンガは，今の時代になって，真実，人間性，理性が揺らぎ崩壊してゆくというが，それは主観的な意見に過ぎない。それらが前世紀において尊重され確かなものであったかといえば，いささか疑問である。(p. 12)

また，これまで人類の歴史のなかで，文化はその時代と社会のエリート達によって方向づけられ，それが一般の人々に，時代と社会の精神態度として普及してきたとするならば，今をどう見ることができるだろうか。これほどまでに，進歩，変化，混沌とした社会は，時代をリードするエリート達が常にそれを望んできたからではないだろうか。より便利に，より新しく，より進歩したものをという具合にである。だとすれば，これを一概に文化の衰退とか危機というのはおかしい。エリートがそれを作りだし，社会もそれを良いものとして受け入れたのである。(p. 19)

Genechtenは，こうとも言っている。変化や革命は，エリート達が指導し，民衆がそれを支持して成しえる事柄である。だとすれば，どうしてその革命家達が間違っていると言い切れるであろうか。(p. 20)

このように述べ，絶対的な理念や正しい理想というものを規定することはできないと考えている。おそらく彼のいわんとしたことは，国家社会主義の社会実現に向けたエリートや大衆の動きを否定するのは，今の時代と社会の要請に反することであり，この動きを誤りと決めつけることはできないということであろう。

ホイジンガは，社会科学のなかでも自分の倫理観にそぐわないものを非道徳的な学問であると批判する。例えば精神心理学がそうである。だがホイジンガは，実験とデータによって出された科学と，主観的な価値観で規定される道徳を混乱し，同じ土俵で比較している。これは誤りである。ホイジンガはその種の学説を危ういということしかできず，決して間違っているとは言えないのであるとGenechtenはいう。(pp. 26-27)

以上がGenechtenの批判であるが，やはり彼は国家社会主義を支持する立場からホイジンガの『明日の影のなかに』を批判している。

Blokと合わせてGenechtenの主張を見れば，次のようにまとめられよう。『明日の影のなかに』は今という時代と社会を悲観的に記しているが，今日は転換期に当たるのであって，過去のどの時代にも変化はつきものであった。もっと今の時代の良い面を積極的に評価するべきである。過去の良かった点ばかり回顧していては進歩がない。時代の変動は社会的要請とともに起きるのであって，過渡期である今を積極的に受け入れるべきである。ホイジンガの批評はあくまでも個人的な主観によるものであり，客観性がなく，因果関係の立証という点では説得力がない。

二人の他にもホイジンガに対する批判的見解はある。

ホイジンガのもとで学んだRomein (1946, p. 203)は，歴史家としてのホイジンガは尊敬に値するが，文明批評家としてのホイジンガは，ブルジョワとしての自分の特権が危うくなったのでこのような行動に出たといっている[9]。

さらにRomeinは，ホイジンガが近代文明の病的症状だけを分析し，その原因については踏み込んでいないという[10]。

ところで，ホイジンガは政治に口出しするのは知識人の行為としては低質なことと考えていたが，当時多くの知識人がナチズムに対抗する組織を結成した。ホイジンガは当初これに参加しなかったため，知識人から机上だけの人と批判されたのであった[11]。

以上，ホイジンガに対する主だった批判の内容をまとめてみた。

おわりに

前稿と合わせてホイジンガ研究の動向を三つの観点で記してきた。まとめるならば，これまでのホイジンガ研究は，歴史家としてのホイジンガに関する研究と，遊びの研究家としてのホイジンガに関する研究が主として精力的に行われてきた。近代文明批評家としてのホイジンガに関する研究も幾つか見られたが，その多くは評論や紹介に留まっていた。しかしここにきてホイジンガを新たに近代文明批評家として捉え，再考察する研究動向が見られる。それらはホイジンガの近代文明批評について，ホイジンガの記した様々な文献からより深く考察している。近代文明批評の全容を体系的に捉えることは難しいが，それでもある程度は整理されてきた。ホイジンガ研究としては，新たな取り組みであり進歩であるといえよう。むろんホイジンガに対する批判的見解も数多く見られ，ホイジンガの近代文明批評にも幾つか問題点はある。それらについては今後の研究成果が待たれる。

「ヨハン・ホイジンガ研究の動向」は本稿で完結するが，締めくくるにあたって一言加えておきたい。

ホイジンガの近代文明批評はおおよそ1910年代に始まったが，1930年代になるとホイジンガ自身が近代文明批評家として世に知られるようになった。それは，時代・社会背景が影響を及ぼしたと思われるが，それ以前のヨーロッパの近代化のなかで起きた様々な矛盾や問題点，特にホイジンガにとってみれば，文化の保持と創造に近代文明が及ぼした負の作用が，ホイジンガを近代文明批評家にさせたと思われる。

歴史家から近代文明批評家へと転向したかに見えるホイジンガではあるが，ファシズム批判や，遊びと文化の研究においても歴史家としての眼を失いはしなかったと考える。

〈注〉

(1) 日本においては西村（1954）が「回想のホイジンガ」で言及している。

「1930年代は，ホイジンガにとって新しい展開の時代だったといえる。彼は文化批判家になったのである。歴史的認識が彼に，周囲にみる禍にみちた変化というものを熟慮すべき材料を与えたのであろう。30年代の央ばにでた『あしたの蔭のなかに』がこの事を証拠立てている。」

ここで西村は1930年代にホイジンガが文化批判家となったといっている。これは Vollgraff がいう近代文明批評家とはややニュアンスが違うものの，この時期の社会状況が，ホイジンガを歴史家から文化批判家へと転向させたという認識では一致する。西村は，本文のなかで，国家権力が学問の領域まで侵入することに対するホイジンガの憤りについて述べ，ホイジンガの思索は常に国家からよりも人間の側から出発しているといっている。「周囲にみる禍にみちた変化」が，ホイジンガに「熟慮すべき材料」を与えたと考えていることから，やはり1930年代がホイジンガを変えたと西村は認識していると思われる。

(2) この時期の近代文明批評に関する文献として，『ブルグント―ロマン民族とゲルマン民族相互間の関係の一つの危機』（1933年），『歴史科学の現状について』（1934年），『ジュリアン・バンダへの手紙』（1934年），『明日の影のなかに』（1935年）があげられよう。

(3) ホイジンガは1902年に29歳で，ミッデルブルフ市長の娘マリー・フィンセンティア・スホーレルと結婚したが，1914年7月に死別している。このとき5人の子どもが残された。

(4) 少なくともホイジンガは，時代の精神について，物質的価値と経済的価値の優先も考えていたと思われる。

(5) Wesseling の分析視点も基本的にはこれと同じ立場にある。

(6) ホイジンガは17世紀のオランダ文化について1932年にドイツで発表し，その後，1941年に『17世紀のオランダ文化』をオランダ語で出版している。

この時期に発表したことの意味を考えると，確かに時代に対する思惑や，近代文明と理想化した過去とのギャップという読みは可能である。歴史家としてのホイジンガであれば，もっと以前に記していても不思議ではないからである。

ちなみに1941年出版の序文で，ホイジンガは「特別な事情により，オランダ人の読者のために，今春……（以後省略）……」と書いている。

これは前年にドイツがオランダを侵略して，その後，占領し続けている状況に対して，過去（17世紀）の栄光を記すことで，オランダ人としての誇り高い国民性の保持と意識の高揚を，国民に訴えようとした意図があったのではないかと思われる。

(7) Blok は『明日の影のなかに』が出版された翌年の1936年にこれを書いている。「行為」について，ホイジンガは1927年に『生活するアメリカ，考えるアメリカ』のなかで若干触れているし，行動主義の観点からも述べている。ナショナリズムについての言及は，Blok のいう通り，1936年までホイジンガの文献には見あたらない。1940年出版の『19世紀末までのヨーロッパ史における愛国心とナショナリズム』，1945年出版の『汚された世界』のなかで述べられている。

(8) Genechten は国家社会主義に同調した人物であるが，学位（博士）を取得した研究者であり，まんざらいい加減な人間でもない。専攻は法学と経済学である。その様な知的エリートがナチスの考え方を支持して，ホイジンガを批判したという点でこの文献には意味がある。国家社会主義運動の組織機関誌というだけで偏見をもって読んではならないと考えるからである。少なくとも当時のオランダにはナチズムを支持する人間がかなりいた。客観的な見方を損なわないためにも，この種の文献についても取り上げる必要がある。

(9) これについては Kadt（1991）も同じような見方をしている。ホイジンガはエリート階級であるがゆえに近代文明を批判したが，いつも労働者階級の生活状態を考えずに発言している。自分の地位が不確かになりつつあったために近代文明批評を行った。また，ホイジンガの近代文明批評は多くのことを一般化し過ぎている。正しいこともあるがそうでないものもあり，一概に近代文明批評に対する評価を一般化することはできないといっている。

(10) これに関して Tollebeek（1996, p. 245）は次のようにいう。Romein や Geyle のような歴史学者は，歴史学が，過去から今へのメッセージ，また，現在の悪い点を改善する役割を負っ

ているという義務感をもっていたのに対し，ホイジンガはただ歴史を叙述することだけに専念していた。そのためホイジンガは両者の批判を受けることになった。

(11) 1935年，ユトレヒト大学の歴史家 Pieter Geyle が，民主主義による統一協会を設立してファシズムに対抗した。これは後にオランダ最大の反ファシズム組織となった。文学者 Menno ter Braak と歴史家 Jan Romein も，ナチズムを監視するオランダ知識人委員会を結成した。

Geyle をはじめ当時の歴史家達は，ナチズムに対するホイジンガの批判は十分ではなく，むしろ近代文明批評という安易な方向へ逃げたとさえ考えていた（Baudet 1962, p. 468)。

〈引用・参考文献〉

Baudet, H 1962, "Kanttekeningen bij Geyl's kritiek op Huizinga", *Tijdschrift voor Geschiedenis*, P. Noordhoff Groningen.

Blok, P. R. 1936, *Niet: in de schaduwen van morgen Maar: in het licht van den komenden dag*, N. V. Voorheen Batteljee & Terpstra Leiden.

Genechten, R. van 1936, "Tegen Huizinga —uit de nevelen van gisteren—", *Nieuw Nederland*, Nederlandsche Nationaal Socialistische Uitgeverij Utrecht.

Hanssen, Léon 1996, *Huizinga en de troost van de geschiedenis*, Uitgeverij Balans.

Huizinga, Johan 1918, *Mensch en menigte in Amerika*, Tjeenk Willink.

——— 1919, "Herfsttij der middeleeuwen.", *Verzamelde werken III*, Tjeenk Willink, 1949.

——— 1927, "Amerika levend en denkend", *Verzamelde werken V*, Tjeenk Willink, 1950.

——— 1932, *Holländische Kultur des siebzehnten Jahrhunderts*, Jena, Eugen Diederichs Verlag, 1932 (Schriften des Deutsch-Niederlandischen Instituts Koln, Heft Ⅰ).

——— 1935, *In de schaduwen van morgen*, Tjeenk Willink.

——— 1935, 藤縄千艸訳『明日の陰の中で』河出書房新社 1971。

——— 1938, *Homo Ludens*, Tjeenk Willink, 1940.

——— 1940, "Patriotisme en nationalisme in de Europeesche geschiedenis tot het einde der 19de eeuw", *Verzamelde werken IV*, Tjeenk Willink, 1949.

——— 1941, *Nederland's beschaving in de zeventiende eeuw*, Tjeenk Willink, Haarlem.

——— 1945a, *in Briefwisseling III 1934-1945*, red. Léon Hanssen 1991, Tjeenk Willink. p. 454.

——— 1945b, *Geschonden wereld*, Tjeenk Willink.

Kaegi, Werner 1947, *Das historische Werk Johan Huizingas*, Universitaire pers Leiden.

Kadt, J. de 1991, *De deftigheid in het gedrang*, Uitgeverij G. A. van Oorschot.

小松原健太郎 1954,「文化史家ヨハン・ホュイジンガの生涯と思想」『西洋史学』第2号。

栗原福也 1972,『ホイジンガ その生涯と思想』潮新書。

Lem, Anton van der 1997, *Het Eeuwige verbeeld in een afgehaald bed*, Wereldbibliotheek.

西村貞二 1954,「回想のホイジンガ」『史学雑誌』第4号。

Pellecom, Aleida Timmerman van 1936, "In de schaduwen van morgen door professor Huizinga", *51 De Nieuwe Gids*, Uitgegeven te 's Gravenhage.

Romein, Jan 1946, *In opdracht van de tijd*, Amsterdam.

Tollebeek, Jo 1996, *De toga van Fruin. Denken over geschiedenis in Nederland sind 1860*, Wereldbibliotheek.

Vollgraff, C. W. 1945, *Herdenking van Johan Huizinga*, Tjeenk Willink.

Wesseling, H. L. 1996, *Zoekt Prof. Huizinga eigenlijk niet zichzelf?*, Uitgeverij Bert Bakker.

（平成12年9月4日受理）